



Title	近代ロシア文学におけるスポーツ表象の変遷：トルストイからトリーフォノフまで
Author(s)	岩本, 和久; Iwamoto, Kazuhisa
Citation	スラヴ研究, 62, 237-255
Issue Date	2015-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83690
Type	departmental bulletin paper
File Information	62-10_RN237.pdf



[研究ノート]

近代ロシア文学におけるスポーツ表象の変遷

—— トルストイからトリーフォノフまで ——

岩 本 和 久

序 論

ソヴィエトの社会において、スポーツが重要な役割を果たしてきたことに異を唱える者はいないだろう。冷戦期の世界において、スポーツは核兵器開発や宇宙競争と並ぶ、米ソの競争の主要な舞台となってきた。スポーツは国際社会に社会主義体制の優越性を示す場であったと同時に、国民意識を統合するための装置でもあった。

ソ連解体後のロシアにおいても、こうしたスポーツの役割は失われていない。2014年のソチ・オリンピック、2018年のサッカー・ワールドカップなどプーチン政権はメガ・イベントを誘致しているが、それらはロシアの復興を対外に誇示するものとなる。ロシア国内においては開催都市の再開発の契機となり、ソ連期のメダル競争へのノスタルジアとあいまって、失われた国民の自信を回復させることにもつながる。ソチ・オリンピックでロシアは金銀銅併せて33個、うち金13個という、いずれも他国を上回るメダルを獲得し、この点でも十分な成果を挙げてみせた。

ロシアのスポーツの歴史についてはサモウコフ『体育の歴史』、ストルボフ『体育とスポーツの歴史』などの文献があるが、そこには近代以前のスポーツ文化としてバープキ、ゴロトキー、ラプターなどの伝統遊戯が挙げられている。また、ボートやスキーなどは狩猟や交通の道具として古くから用いられており、それらにも競技スポーツの源を遡ることができる¹⁾。

19世紀後半から20世紀にかけては、競馬、テニス、サッカー、レスリング、自転車競走など、イギリスやフランスで発達した近代スポーツがロシア帝国にも導入されることとなった。20世紀初頭には、ロシア帝国出身のレスリング選手（イヴァン・ポドドゥブヌイやゲオルグ・ハツケンシュミット）や自転車選手（セルゲイ・ウートチキン）が国際的に活躍している。

革命後のソ連では労働者や兵士の健康促進のため、スポーツの振興がはかられた。スターリン期には社会主義版のオリンピックとも言うべきスパルタキアード大会が開催され、プロパガンダのためにスポーツマンもパレードを行った。1931年には体力測定システムGTOも作られた（GTO [ГТО] は、「労働と国防のための準備」を意味する «готовность к труду и обороне» の略称）。

1) Самоуков Ф.И. История физической культуры. М., 1964; Столбов В.В. История физической культуры и спорта. М., 1983. 一方、冷戦期の西側社会ではオリンピックで躍進するソ連に対する関心が高まり、ソヴィエトのスポーツ文化を紹介する著作が英語で発表されている。たとえば、Henry Walter Morton, *Soviet Sport: Mirror of Soviet Society* (New York, 1963); James Riordan, *Sport in Soviet Society: Development of Sport and Physical Education in Russia and USSR* (Cambridge, 1977) を挙げることができる。

ソ連がオリンピックに参加するようになったのは、第2次世界大戦後の1952年からである。このヘルシンキ大会でアメリカに次ぐ71個のメダルを獲得したソ連だが、4年後のメルボルン大会ではメダルの数を、アメリカを上回る98個にまで伸ばした。

ソ連解体に伴う混乱は有力選手やコーチの国外流出をもたらし、ロシアのスポーツ界は衰退していった。だが、21世紀に入ってからの経済発展の結果、国家レベルではスポーツ強化のための予算が拠出されるようになり、市民レベルでもフィットネスクラブなどスポーツ文化が流行するなど、再びスポーツ大国復興の道を歩み始めたかに見える。

このようなソヴィエトのスポーツ文化に、文化研究者はいかにアプローチすべきなのか。ソ連解体後、冷戦期のイデオロギー対立から距離を置いた形でソヴィエト文化を研究することが可能になったが、欧米の歴史家はそのような状況下でソ連のスポーツについても改めて関心を寄せている⁽²⁾。一方で、文学、美術、映画といった領域でスポーツがいかに表象されてきたか、という点について、文学研究や視覚芸術研究の立場からアプローチがなされることはあまりなかった。文学の中に登場するスポーツの描写や、あるいは社会主義体制下で制作されたスポーツ絵画は、スポーツ史という体育学の一領域の資料として、あるいは歴史研究の一次資料として扱われるにとどまっていたのである。

美術史研究の立場からロシアのスポーツ文化にアプローチした例外的な著作として、マイク・オマホニー『ソ連のスポーツ』を挙げることができる。これは1920年代から80年代にかけてソ連で制作されたスポーツ絵画、彫刻、写真を対象としたもので、アイコンなど革命前の美術との関連、パレードやスタジアム建設といったスポーツの制度化と美術の関係、非公式芸術に見られるソ連文化の象徴としてのスポーツ・イメージなどが論じられている⁽³⁾。

また、このオマホニーも寄稿している論集『ユーフォリアと消耗』も、文化批評的な立場からのスポーツ研究の例として挙げることができるだろう。これはハンブルグで開催されたシンポジウムの報告をまとめたもので、ナチス占領下のキエフで行われたサッカーの試合(いわゆる「死のゲーム」)やソ連期の登山といった歴史的な出来事を考察した論文の他、視覚表象としてのスポーツ、スポーツの中の性差といった主題を扱った論文が収められている⁽⁴⁾。

もちろん、ロシア文学においてもスポーツを取り上げた作品はたくさんあるし、それらについて書かれた論文も多数存在する。だが、そのような作業は作家研究の枠の中で行われることがもっぱらで、スポーツ表象の系譜が考察されてはいないのだ。

とはいえ、ロシア文学という枠を離れ、別の言語で記された文学に視線を移せば、「スポーツと文学」という主題を扱った先行研究を挙げることはできる。

2 Robert Edelman, *Serious Fun: A History of Spectator Sports in the USSR* (New York, 1993); Karen Petrone, "Life Has Become More Joyous, Comrades": *Politics and Culture in Soviet Celebrations, 1934–39* (Ann Arbor, 1994); Stefan Plaggenborg, *Revolutionskultur: Menschenbilder und kulturelle Praxis in Sowjetrussland zwischen Oktoberrevolution und Stalinismus* (Köln, 1996); Tricia Starks, *The Body Soviet: Propaganda, Hygiene, and the Revolutionary State* (Madison, Wis., 2008); Susan Grant, *Physical Culture and Sport in Soviet Society: Propaganda, Acculturation, and Transformation in the 1920s and 1930s* (New York, 2013).

3 Mike O'Mahony, *Sport in the USSR: Physical Culture-Visual Culture* (London, 2006).

4 Nikolaus Katzer, Sandra Budy, Alexandra Kohring and Manfred Zeller, eds., *Euphoria and Exhaustion: Modern Sport in Soviet Culture and Society* (Frankfurt-New York, 2010).

日本ではスポーツ史家の稲垣正浩が、世界各国の文学作品に表れたスポーツ描写について多くの著作を発表している⁽⁵⁾。

アメリカ文学の世界では、文学研究者や文化研究者がスポーツの文学的描写に注目した例が少なくない。たとえば、クリスチャン・メッセンジャー『アメリカ文学におけるスポーツと遊戯の精神』、ジェフリー・ヒル『スポーツと文学的想像力』といった著作を挙げられるが、このメッセンジャーの研究はアメリカ文学に表れるスポーツ・ヒーローとして、「ポピュラー・スポーツ・ヒーロー」、「スクール・スポーツ・ヒーロー」、「儀礼的スポーツ・ヒーロー」の3つのタイプを挙げていて興味深い。大衆に崇拜されるプロ選手が「ポピュラー・スポーツ・ヒーロー」、学校のスポーツ文化を代表するのが「スクール・スポーツ・ヒーロー」である。「儀礼的スポーツ・ヒーロー」というのは説明がないとわかりづらいが、ヘミングウェイの「老人と海」のように、自然や自らの身体との孤独な戦いに臨むのがこのタイプである⁽⁶⁾。

本稿では上記のような先行研究を意識しながら、ロシアの近代スポーツが発展する中でロシア文学の中のスポーツ描写がいかに変容してきたかを、個別の作家研究の枠を横断しながら検討し、これまで意識されることのなかったロシアにおけるスポーツ文学の系譜を明らかにしてみたい。文学におけるスポーツ描写については近代以前までさかのぼることも可能ではあるが、ここでは競技スポーツが発展し、その制度化が進んだ19世紀後半から20世紀にかけての時代を対象とすることとする。

メッセンジャーの指摘したスポーツ・ヒーロー像は、ロシア文学のスポーツ描写とも無縁ではない。メッセンジャーや他の多くの論者がスポーツを論じる際に参照する、ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』やロジェ・カイヨワ『遊びと人間』といった遊戯をめぐる古典的議論も同様である。

だが、スポーツが国家的事業と化していたソ連期のスポーツ文学においては、アメリカ文学のヒーロー像や遊戯の精神とは異なる性格を、スポーツ描写の中に見出すこともできるだろう。また、新しい社会システムの整備が開始されたスターリン期と、「雪どけ」以降の1960~1970年代とでは、スポーツ文学の性質も異なっているはずだ。

ロシアの作家たちがスポーツの中に何を見ようとしてきたのか、スポーツをいかなるものとして理解してきたのか、そうした想像力は近代スポーツ制度の発展の中でどのように変容してきたのか、それが本稿の課題である。方法としては帝政期、スターリン期、雪どけ期の3つの時代に焦点を当て、それぞれの時代の文学作品においてスポーツがいかに関わられてきたのかを検討したい。

5 稲垣正浩『スポーツを読む』三省堂、1993年；同『児童文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2001年；同『伝記文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2002年；同『紀行文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2002年；同『宗教文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2003年；同『評論文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2003年；同『伝承文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2005年；同『イギリス文学の中にスポーツ文化を読む』叢文社、2006年。

6 Christian K. Messenger, *Sport and the Spirit of Play in American Fiction: Hawthorne to Faulkner* (New York, 1981); Jeffrey Hill, *Sport and the Literary Imagination: Essays in History, Literature, and Sport* (New York, 2006).

以下の本論の記述においては、文学作品だけでなく、その作者がいかに関わってきたかも叙述している。文学研究はテキストに書かれたものだけを扱うべきだとするフォルマリズムの考え方もあるだろうが、本稿で作者の人生というテキスト外の世界を参照するのは、ロシアにおけるスポーツの発展（作者の人生もその一部である）という社会的変化と文学との関わりを確認したいからであり、またスポーツのような特定の活動領域を扱う文学ジャンルにおいては、作者がその分野にいかに通暁しているかを読者が重視してきたからである（SF、戦争文学、警察小説、山岳小説など、同様のケースはいくつも指摘できる）。

1. 運命との対決（帝政期の作家、亡命作家）

この章では帝政期の作家レフ・トルストイ、クプリーンと、亡命作家ナボコフを扱っている。政治的、社会的に異なる立場に置かれた作家を同じ項目で取り上げるのは、それぞれの作品に表れた主題が共通しているためである。

スポーツは多くの作家たちを魅了し、作家たちは自らスポーツに取り組んできた。クリケットやボクシングに親しんだコナン・ドイル、ボディビルに取り組んだ三島由紀夫など、いくつもの作家の名をすぐに挙げるができる。

19世紀後半から20世紀初頭にかけての近代スポーツの発展期にスポーツを描いたロシアの作家たちの多くもまた、自らスポーツに取り組んでいた。文豪レフ・トルストイもその1人だ。

トルストイは乗馬を好んでおり、乗馬姿の写真が多く残されている。また、67歳という高齢になってから自転車の運転にも挑戦しており、モスクワのトルストイ博物館にはその自転車が展示されている。

『トルストイ事典』には「スポーツ」という項目が立てられているが、その記述によれば、少年時代から体操に親しんでいたトルストイは書斎にダンベルを置き、息子たちにも体操を行わせていた。水泳やテニスには家族で取り組み、1890年代後半にはヤースナヤ・ポリャーナの邸内にテニスコートを作ってしまった⁽⁷⁾。

トルストイがスポーツを好んだのは、健康で頑強な身体を彼が好んだからだろう。強い身体は民衆の生活に欠かせぬものでもあった。ルソーの影響のもと、プリミティヴな生活をトルストイが評価していたことは言うまでもないが、そのような彼の人間観は次の文章からもうかがうことができる。

鳥は飛んだり、歩いたり、啄んだり、考えたりせねばならぬようにできていて、これら全てのことをする時、鳥は満足し、幸福なのであり、その時、鳥は鳥なのである。人間もまったく同じなのだ。人間は歩いたり、転がしたり、持ち上げたり、引きずったり、指や目や耳や口や脳を使って働いたりする時、その時、初めて満足できるのであり、その時、初めて人間は人間なのだ。⁽⁸⁾

7 Шестакова Е.Г. Спорт // Л.Н. Толстой. Энциклопедия / Сост. Н.И. Бурнашевой. М., 2009. С. 409–410.

8 Толстой Л.Н. Так что же нам делать? // Полное собрание сочинений. Т. 25. М., 1937. С. 390.

トルストイの考えでは、人間とは本来、頭脳だけでなく身体を使って働くものなのだ。

トルストイとスポーツの関わりについては、別の背景を指摘することもできる。トルストイはそもそも、運動に惹きつけられていたのだ。彼にとっては絶えざる運動こそが、生命の本質だったのである。たとえば、彼は「生とは中断することのない運動」であるとする。

生とは中断することのない運動であるが、世界との関係を変えずにながらも、つまり、この生の世界に入った時と同じ愛の段階にとどまりながらも、生の停止を感じる時、彼は死を見ることになるのである。⁽⁹⁾

このようなトルストイの身体観、運動観とは別に、彼が同時代の他の作家と共有していたスポーツ理解として、運命的な敗北という主題を挙げることができる。

スポーツという言葉は中世フランス語の *desport* を語源とするものだが、*des-* (ラテン語の *dis*) は「離れる」、*port* は「運ぶ」を意味しており、つまり日常の営みから離れて行われる「気晴らし」が本来のスポーツということになる。

だが、勝負を伴うスポーツは「気晴らし」や「遊戯」であると同時に、ある種の真剣さを伴っている。「ロマン主義的苦痛」はマリオ・プラッツの名著のタイトルだが、英雄への憧憬と死や恐怖や苦痛への愛着が混在したロマン主義の時代を経験した 19 世紀、さらにはリアリズムの時代を経た後にロマン主義の美学が甦った 19 世紀末から 20 世紀初頭においては、スポーツもまた生命を賭けて運命と対決するものとみなされたのだ。

競馬に参加する『アンナ・カレーナ』のヴロンスキイには、そのような運命的な敗北を見ることができる。愛馬フルフルに騎乗するヴロンスキイは、意図せぬ強引な動きで馬の背を痛めてしまう。もはや馬は走ることができず、ヴロンスキイは自らの過失と敗北を受け入れるしかない。

負傷した馬は射殺されることになる。語り手はこの結果を、ヴロンスキイにとっての人生最大の不幸とする。それはヴロンスキイ自身の行動の結果であり、責任を自分一人で引き受けなければならないからこそ、最大の不幸と化するのだ。

人生で初めて、彼はもっとも辛い不幸を、取り返すことのできない、自分自身の過ちの結果である不幸を経験したのだ。⁽¹⁰⁾

『アンナ・カレーナ』における競馬の場面は、競技スポーツのロマンティックな理解を鮮明に伝えている。重要なのは孤独なプレイヤー個人の物語であり、一切の責任は彼のもとにある。スポーツは人生を賭けるものであり、しばしば死を伴う結果となる。『アンナ・カレーナ』の場合、ヴロンスキイが命を失うことはないが、代わりにフルフルがあの世界に送られる。それはまた小説の結末に置かれたヒロイン、アンナの悲劇的な死を読者に予兆させるものでもある。

9 Толстой Л.Н. О жизни // Полное собрание сочинений. Т. 26. М., 1936. С. 409.

10 Толстой Л.Н. Анна Каренина // Полное собрание сочинений. Т. 18. М.-Л., 1934. С. 211.

スポーツが人生を賭した戦いであるという考え方は、アレクサンドル・クプリーンの短編においていっそう顕著に見ることができる。

19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した作家クプリーンは、軍人たちの諍いを描いた『決闘』（1905）や身分違いの恋を主題とした『ざくろ石の腕輪』（1911）、娼家を舞台とする『ヤーマ』（1915）といった作品で知られている。いずれも社会の中の人間模様を語りながら、帝政末期の退廃や閉塞感を伝えるものだ。

写真で伝わるクプリーンの体軀は大柄で恰幅の良いものだが、これは美食や運動不足による肥満ではない。彼は肉体美に惹きつけられており、自らもスポーツにいそしんでいた。オレグ・ミハイロフによるクプリーンの伝記には、次のように記されている。

若い頃、身体的に並外れて強かったクプリーンは、自らの筋肉や意志の強さを試しうもの、興奮や危険をもたらすものなら何であれ、特別な情熱をもって取り組んだ。彼はまるで、貧しかった幼年時代に使い切れなかった蓄えを、使い果たそうとしているかのようだった。キエフに体育協会を組織する。43歳になって突然、世界記録保持者ロマネンコのもとで、競泳を学び始める。セルゲイ・ウートチキンと気球で上昇する。潜水服を着て、海底に潜る。イヴァン・ザイキンとファルマン式飛行機で飛ぶ。⁽¹¹⁾

オデッサ出身のセルゲイ・ウートチキンは19世紀末から20世紀初頭に自転車選手として活躍しているが、その後、舞台を空に移し、気球や飛行機による飛行ショーをロシア各地で行った。

ファルマン式飛行機はフランスのファルマン兄弟が開発した複葉機で、第一次世界大戦前に世界各国で用いられたものである。危険を伴う飛行は当時のロシアでは、多くのスポーツマンを惹きつけていた。ウートチキンは自転車選手だが、イヴァン・ザイキンはレスラーだ。

ザイキンとクプリーンが飛行したのは1910年のオデッサでのことで、その場にはウートチキンもいた。当初、うまく飛行していたザイキンだが、知人のクプリーンを同乗させたところ、2人の体重と風向きのせいで飛行機はバランスを崩し、墜落してしまった。幸い2人とも無事だったのだが、その後、飛行機に乗る機会はなかったという。1年後、クプリーンはこの事故について、エッセイ「私の飛行」を執筆している。

ザイキンとの交遊はその後長く続いた。クプリーンはレスリングを愛し、また自らもレスリングを学んでいた。

古代ギリシアに遡るとされるレスリングの歴史だが、グレコローマン・スタイルのルールが定められ、競技としてのレスリングが開始されたのは、19世紀のフランスにおいてである。20世紀初頭のロシアではサーカスの出し物としてレスリング競技が行われ、そうした場で活躍する選手たちが本場フランスの大会にも出場していた。

ボリス・バルネットの映画『レスラーと道化師』（1957）は、そのような時代に活躍したレスラーのイヴァン・ポドドゥブヌイとサーカスの道化師アナトーリイ・ドゥーロフを主人公としている。ポドドゥブヌイはパリの大会で世界チャンピオンとなった、伝説的なレスラーだ。

11 Михайлов О. Куприн. М., 1981. С. 152.

クプリーンの短編「サーカスにて」(1902)も、サーカスで試合を行うレスラーを主人公としている。

ロシア人のレスラー、アルブゾフは、アメリカからチャンピオンのレーバーを招いて戦うことになっているが、試合前日に体調を崩してしまう。どうにも頭が重たいのだ。アルブゾフは試合の延期を支配人に申し出るが、契約を理由に聞き入れてもらえない。家に戻ったアルブゾフは、熱病にかかったような悪寒に襲われる。翌日の試合に臨んだアルブゾフは獣のようなレーバーの前に敗れ去り、楽屋までたどり着いたものの、そこで絶命してしまう。

この小説も他のクプリーンの作品と同様、衰弱した主人公の姿を通して、社会の退廃を描いたものと言えるだろう。頑強な身体を誇っていたはずのレスラーは、意識を混濁するまでに追い込まれ、生命そのものを失ってしまう。自らの危機を自覚した彼は医師や支配人を頼るが、契約という資本主義社会の論理は、そんな彼の訴えを受け入れない。

この小説は一方で、生死を賭す戦いというスポーツ観を鮮明に示してもいる。アルブゾフは戦いの結果、命を落としてしまうが、自らも命がけで飛行や潜水に挑んだクプリーンのとって、そのようなスポーツ観は親しみやすいものであったことだろう。

クプリーンの短編「エメラルド」(1907)もまた、スポーツによる運命的な死を描いている。

「エメラルド」とは、この短編の主人公となる馬の名前である。馬の一生を馬の視点から描いている、という点では、トルストイの中編『ホルストメール』の影響をうかがわせる。一方で、競馬の描写という点では、トルストイの『アンナ・カレーニナ』との比較も可能だろう。『アンナ・カレーニナ』では騎手であるヴロンスキイの感情や心理が語られるのに対し、「エメラルド」では馬の感情や心理が、また馬と騎手との対話が、馬の視点から語られる。

「もっとだ」騎手は許してくれた。「もっと、もっとだ！」エメラルドは少し苛立って、自分のありったけの力を一気に疾走に注ぎ込みたくなった。「できるかな？」と彼は思った。「いや、まだ早い、興奮するな」魔法の両手が落ち着かせようとしながら、答えた。「まだ後だ」⁽¹²⁾

穏やかな牧場から引き離されたエメラルドは、競馬にデビューする。だが、懸命に走って勝利したものの、この番狂わせは観客からペテンとみなされる。厩舎に戻ったエメラルドはその後、レースに出ることもないまま、毒殺されてしまう。

この短編で死ぬことになるのは、スポーツの敗者ではなく勝者だ。試合に勝利したものの、それが理由で殺されてしまうのである。とはいえ、スポーツによって運命的な死がもたらされる、という点は、「サーカスにて」と共通している。

クプリーン自身とスポーツの関わりには、レスリングや飛行といったモダンなスポーツ文化が20世紀初頭に開花したことを見て取ることができる。「サーカスにて」や「エメラルド」といった彼の短編ではまた、邪悪な社会によって才能が潰されていくという、世紀末特有の悲観的な世界観が展開されている。だが、クプリーンより後の時代を生きたナボコフの作品では、やはりプレイヤーの運命を扱われながらも、運命を克服する主人公の姿が描かれることになる。

12 *Куприн А.И. Собрание сочинений в шести томах. Т. 3. М., 1994. С. 164.*

自らもスポーツに親しんだトルストイやクプリーンと同様、ナボコフもスポーツマンであった。たとえば、ブライアン・ボイドは、イギリスに留学していた1920年のナボコフがボクシングやサッカーに熱中していたことについて、次のように紹介している。

活力の捌け口は、これだけではなかった。二月の終わりに、穀物取引所で開かれたボクシング選手権に出場した彼は、準決勝まで勝ち進んだが、そこで動物学のクラスメイトにノックアウトされてしまった。しかし、その相手はナボコフが記憶しているようなインド貴族の息子ではなく、シンハラ人のポール・レイリスだった。レイリスの強力なパンチで、ナボコフは鼻の軟骨を傷め、それ以来、彼の右の鼻樑はS字形に曲がってしまったのだ。

トリニティー・コレッジのサッカーチームでの活躍ぶりは、これほど屈辱的ではなかった。自ら評したところによれば、自分は「むらっけだが、ひとをうならせるタイプのゴールキーパー」だったという。ナボコフ——チームメイトたちからは、「ナブカフ」とか、ふざけて「マクナブ」とか呼ばれていた——の考えでは、イギリス人は、固いチームワークを称えて、「めだつことを嫌う国民」なので、ここでは、イタリアやスペインのサッカー・ファンが熱狂するようなゴールキーパーのロマンや、バイロンの孤高と独立は、その価値を認められることがない。それでもやはり、セント・ジョンズ・コレッジやクライスト・コレッジのチームとの対戦を語る彼の口調には、わくわくさせるような魅力が感じられる。湿地からの冷たい東風に、グラウンドが吹きさらされる日には、まわりからの孤立感は、彼をいっそう燃え立たせた。相手のフィールドでゲームが進んでいるあいだ、ナボコフは、チームメイトには理解できない異国の言葉で、詩作にふけていたが、ときには詩的恍惚から抜け出すのが遅すぎて、ボールがゴールを襲うのに追いつけないこともあった。この学期の途中、詩作の邪魔になるという理由から、彼は動物学を放棄したようだ。サッカーも図書館に通う妨げになったが、もちろん彼は、サッカーをやめはしなかった。⁽¹³⁾

その6年後、ベルリンで暮らしていたナボコフの生計を助けたのも、スポーツの経験だった。ナボコフはテニスのコーチをし、時にはボクシングの試合も行った。

ナボコフは一時間三ドルで、テニスのコーチをしていた。晴れた土曜日には、少なくとも理論的には、十コマのレッスンが可能だったが、「それだけの数をこなしたことはなかった。だが、これは実現可能な夢だった」。ボクシング教室の生徒を集めるために、ヨシフ・ゲッセンの家で開かれた、ある日曜の集いで、ゲオルギイ・ゲッセンと公開試合を行ったこともある。ゲッセンの家の居間で打ち合いがはじまると、突然ゲオルギイが、台本を無視して、強烈なパンチを放ったので、ウラジーミルの鼻からは血が噴き出した。リハーサルのときに、友をいじめすぎたのかもしれない、とのちにナボコフは反省している。⁽¹⁴⁾

このような経験を踏まえたスポーツのイメージは、ナボコフの作品中でも随所に登場する。『ロリータ』(1955)のハンバート・ハンバートがヘイズ夫人の家で最初に見出したものは

13 ブライアン・ボイド(諫早勇一訳)『ナボコフ伝：ロシア時代(上)』みすず書房、2003年、211-212頁。

14 ボイド『ナボコフ伝：ロシア時代(上)』331頁。

ロリータのテニスボールであり、彼が後にロリータにテニスを教えるようになることを予告している。『青白い炎』(1962)のキンボートは乗馬やスキー、スケート、レスリング、登山に親しんでいると語る。また、ゼンブラ国王の宝物を探すためにソヴィエトから招聘された2名の専門家はサッカーを得意とし、ソ連のゴールキーパーであるレフ・ヤシンの物真似をしてみせる。『透明な対象』(1972)の主人公ヒューは、美女アルマンドに誘われて氷河のスキー場に向かう。

『プニン』(1957)では、ロシア文学で最初にボクシングを描写したのがミハイル・レールモントフであり、テニスへの言及が最初になされたのはトルストイ『アンナ・カレーニナ』でのことだ、という指摘もなされており、ナボコフが文学におけるスポーツ描写に自覚的だったことを伝えている。

ボクシングについて語ったレールモントフの作品というのは、叙事詩「皇帝イヴァン・ヴァシリエヴィチと若き親衛隊士と勇敢な商人カラーシニコフの歌」(1838)のことであろう。これは16世紀のロシアを舞台とした作品であり、近代のボクシングを扱っているわけではないが、皇帝や貴族、親衛隊士の見守る中での試合を描いており、ロシアにおけるスポーツ文学の源流とみなしうるものだ。親衛隊士に妻を辱められた商人カラーシニコフは、イヴァン雷帝の前で行われた拳闘の試合で親衛隊士に挑み、相手の命を奪う。この武勇によりカラーシニコフの家族は皇帝から褒賞されるが、カラーシニコフ自身は殺人の罪で処刑されてしまう。勝利の結果、殺害されるというプロットは、クプリーン「エメラルド」の先駆けと言えるだろう。

ナボコフがロシア語で執筆した初期の作品では、スポーツが物語の進行に直接、関わっている。たとえば、長編『キング、クイーン、ジャック』(1928)はデパートの社長ドライバーとその夫人マルタ、夫人の愛人となる従業員フランツの三角関係を描いているが、フランツが働くのはデパートのスポーツ用品売り場なのだ。

一方で、ドライバーもフランツもスポーツが得意というわけではなく、そのことが小説に喜劇性を与えると同時に、プロットを展開させる動機ともなっている。テニスをしたことのないフランツはテニス好きのドライバーとコートに出るものの、ラケットにボールをかすらせることすらできない。ドライバーもスキーは苦手で、スキー・リゾートから予定を切り上げて帰宅し、マルタやフランツを混乱させる。ドライバーは泳ぐこともできず、そのことが理由でマルタとフランツは彼を溺死させようとする。

『カメラ・オブスクーラ』(1932)の主人公クレッチマーの娘イルマは、アイス・ホッケーの試合を見に行っただけで病気になる、命を落としてしまう。

スポーツがプレイヤー自身の運命と関わっている作品も、ナボコフは執筆している。たとえば、初期の奇妙な短編「翼の一撃」(1924)はスイスのスキー・リゾート、ツェルマットを舞台にしているが、この作品では周囲の若者たちを魅了する女子スキー選手が競技中の事故で命を落としてしまう。大会の数日前、彼女はクリフジャンプをした際に天使と出会ったのだが、ホテルの彼女の部屋を訪れた天使を語り手の男性が追い払ってしまっていた。語り手は彼女の死を、天使の報復とみなす。

プレイヤーの運命がスポーツによって左右されるという例として、より有名なのは『ルージンの防衛』(1929-30、英訳や邦訳の題は『ディフェンス』)だ。これはチェスのプレイヤー

であるルージンの、悲劇的な生を描いた小説である。国際的にはチェスもスポーツとみなされており、国際チェス連盟は IOC の承認を受けている。

ナボコフの小説の中で、チェスの名手であったルージンは強敵のトゥラチを前に、精神に変調をきたす。周囲の人々の動きもルージンには、チェス盤上の駒の動きに思えてしまうのだ。ゲームのような世界からの出口を見失ったルージンは最終的に、窓から身を投げることになる。

スポーツのイメージにもっとも満たされているナボコフの作品は『偉業』（1932、英訳の題は『栄光』、邦訳の題は『青春』）だろう。ロシアからの亡命者（ただし、祖先はスイスからの出身者）である青年マルティンが、伯父の暮らすスイスと、留学先のイギリスで過ごした日々を描いている。

マルティンはスイスではテニス、スキー、登山を行い、イギリスではサッカーやボクシングに熱中する。これは彼にとっては克服すべき試練であり、多くの場合、彼は成功を収めることになる。

『ディフェンス』のヒロインの母は、プレイヤーというルージンの職業を理解できず、「(太陽まで飛ぶ飛行機やマラソン、オリンピックといった) 無意味な記録」⁽¹⁵⁾ に惹かれる現代の病理と考える。一方、『偉業』では、冒険の意味を理解できず、イギリス流のナンセンスと考えるフランス人に、マルティンが次のような説明を行う。

「あなたたちイギリス人は賭けや記録が好きなんですよ〔中略〕冰山とか、北極とか言いましたっけ？それとも熱病で死ぬことになる沼地ですか？」「ええ、あなたは問題がわかっていらっしゃるんですね。でも、それだけじゃない、スポーツだけじゃないんです。もっといろいろなことがあるんです。何というか、まだ愛とか、大地に対する優しさとか、かなり神秘的な何千もの感情があるんですよ」⁽¹⁶⁾

マルティンにとってのスポーツは、単なるスポーツにとどまるものではない。それは勝利や記録を目指すものではなく、高次の生につながるもの、世界の神秘と触れ合うためのものなのだ。だからこそ、小説の最後でマルティンはヨーロッパを捨て、単身ヴィザなしでソ連に潜入するという無謀な冒険に赴くのである。

ナボコフとスポーツについては、クズネツォフもまた次のように論じている。

ナボコフの美学においてスポーツは芸術のひとつの段階に位置しているのであり、スポーツに関する細部は、主人公に「美」と一体化できる能力があるかないかを特徴づけ、示す役割を果たしているのである。⁽¹⁷⁾

15 *Набоков В.* Защита Лужина. Анн Арбор, 1979. С. 121.

16 *Набоков В.* Подвигъ. Анн Арбор, 1974. С. 179.

17 *Кузнецов В. В. В. В. Набоков: «Думаю, что я особенно чувствителен к магии игр...» // Вестник Челябинского университета. Серия 2. 1999. № 2 (9). С. 119.*

学校を舞台としているという点では、『偉業』のサッカーやボクシングはアメリカ文学についてメッセンジャーが指摘した「スクール・スポーツ・ヒーロー」の変種とみなしうる。だが、孤独な登山や高次の生への志向は、むしろ「儀礼的スポーツ・ヒーロー」に通じるものだ。メッセンジャーによれば、アメリカ文学の「スクール・スポーツ・ヒーロー」はスポーツを通じて社会的な役割を獲得していくが、「儀礼的スポーツ・ヒーロー」が志向するのはある種の聖性である。

スポーツに携わるナボコフの主人公たちは、個として運命に向き合っている。それはトルストイやクプリーンの場合も同様だ。ナボコフがそのようなロマンティックな態度を保ち続けられたのは、彼が亡命者であったからだろう。帝政期の作家たちと同じ本章にナボコフを含めたのも、そのためである。一方で、ソヴィエトの社会主義リアリズム文学においては、スポーツの主題もまた別の発展を見せることになる。

2. 祖国の防衛（スターリン期）

革命後のソヴィエトでは、「見る」ものとしてのスポーツがいっそうの発展を遂げた。特に人気を博したのはサッカーであり、第2次世界大戦後はアイス・ホッケーもファンを増やしていった。

労働者の健康維持促進のためにスポーツが重要であることは、ソ連の指導者たちにも理解されていた。だが、ソヴィエト初期には「見るスポーツ」の機能が、幅広く理解されていたとは言い難い。

ソヴィエトの医師たちやプロレトクリトは、競技スポーツをブルジョア的な有害なものみなしていた。それは身体のエネルギーを労働以外の営みに向けることに他ならず、また試合中の接触による傷害の危険がつきまとっているからである。代わりに推奨されたのは、職場における体操だった。

だが、結局のところ、こうした公衆衛生的な発想がソヴィエト社会を支配することはなく、むしろ権力の側が「見るスポーツ」としてのサッカーを支援することになった。1923年にはGPU（国家政治保安部）のサッカー・チーム「ディナモ」が作られ、28年にはモスクワにディナモ・スタジアムが開設された。1936年にはスターリンの見守る中、「赤の広場」でサッカーの試合（モスクワのクラブ「スパルタク」の紅白戦）が行われたが、これは「身体文化の日」のパレードの一環であった。「見るスポーツ」としてのサッカーは、国家のプロパガンダの一部となったのである。

そのような時代を文学の世界でいち早く表現したのが、ユーリイ・オレーシャの長編小説『羨望』（1927）である。そこには、ソヴィエト対ドイツのサッカーの試合が描かれている。

1899年生まれのオレーシャはオデッサで少年時代を過ごしているが、それはサッカーがロシアに普及し始めた時期のことだった。子供たちがサッカーの指導を受けていた一方で、大人たちはこのスポーツを理解できずにいたことを、オレーシャは『1行とて書かざる日なし』の中で回想している。

僕の周囲の大人たちはそれが何なのか理解できずにいた——僕が毎週土曜日と日曜日に出かけていくサッカーがだ。

ボールを蹴る……足で？何でまた足で？このゲームは観客には美的に見えなかった——暴れているみたいだったのだ。不良の生徒たち、路上の少年たちならかまわんがね！ユーラをサッカーに送り出しても、意味はないよ。どこでやってるんだ？スポーツクラブのフィールドさ、と僕は答える。どこでだ？スポーツクラブのフィールドだって？それは何だ？何もわからん、と父は言う。どんなフィールドだ？

「スポーツクラブのだよ」僕は新しい文化の揺るぎなさを込めて、そう答える。⁽¹⁸⁾

大人たちが理解できないスポーツ、それは新しい文化そのものだった。アヴァンギャルドの芸術家たちもスポーツに関心を寄せた。アレクサンドル・ロトチェンコはスポーツマンのパレード風景を写真に収め、ヴラジミール・マヤコフスキイは詩作品「同志たち、赤いスポーツについて議論したまえ」（1928）を作った。サッカー・ファンであった作曲家ショスタコーヴィチは、サッカー・チームについてのバレエ『黄金時代』（1930）を作曲した。1930年代の社会主義リアリズムの時代においても、アレクサンドル・デイネカやアレクサンドル・サモフヴァロフ、ヨシフ・チャイコフらにより、スポーツ絵画や彫像が制作された。

オレーシャもまた、サッカーを愛し続けた。1930年代にオデッサを訪問した彼が、都市の発展の象徴として見出したのも、サッカー場だった。「オデッサのスタジアム」（1936）に彼は、こう記している。

これは未来の風景だ。〔中略〕このスタジアムはとても夢に似ている——と同時にとても現実的だ。〔中略〕意識の中に叙事詩的感覚が生まれる。これはもうあるんだ、存在しているんだ、続くんだけ、と自分に語りかけることになる。国家が、社会主義の国が、私たちの祖国が、そのスタイルが、その美が、その日常性が、その壮麗な現実性が存在しているのだ。⁽¹⁹⁾

オレーシャは、モスクワの人気サッカー・チーム「スパルタク」で活躍したアンドレイ・スタロスチンとも交遊を持っていた。オレーシャが革命前の古いサッカー用語を使っていたこと、1913年にロシア帝国トーナメントを制したオデッサ・チームのメンバーであるグリゴリイ・ボゲムスキイと少年時代にプレーした経験をオレーシャが誇りに思っていたことを、スタロスチンは回想している。そんなオレーシャを、スタロスチンはスタジアムに招待した⁽²⁰⁾。

オレーシャはその作品の中でも、スポーツの主題を繰り返し用いている。短編「チェーン」（1928）は、主人公の少年がセルゲイ・ウートチキンと出会う物語だ。映画シナリオ『厳格な若者』（1934、日本では『未来への迷宮』の題で公開された）では、スポーツマンの青年たちが体力検定システムGTOの新基準を作ろうとする。短編「ナターシャ」（1936）の結末には、パラシュートで降下する若者たちが登場する。児童文学『3人のふとっちょ』（1928）

18 Олеша Ю. Избранное. М., 1974. С. 414.

19 Олеша. Избранное. С. 258.

20 Воспоминания о Юрии Олеше. М., 1975. С. 58–64.

に登場するのはサーカスで活躍する芸人たちだが、身体能力を誇示する彼らもまた、スポーツ選手の先駆けとみなしうるだろう。

『羨望』にサッカーの試合のエピソードが含まれているのも、オレーシャがサッカーを愛していたためである。スタロスチンによれば、ロシア文学で初めてサッカーを描いたのだと、オレーシャは語っていたという⁽²¹⁾。

『羨望』の設定は単純なものではない。これは革命前の文化と革命後の文化の対立を描いた小説だが、中年男性、若者、女性という3人の登場人物それぞれに対応した、分身のような人物が現われる。自称発明家のイヴァン、台本作者のカヴァレーロフ、家主のアーネチカが革命前の古い世界の生き残り、人民委員のアンドレイ、サッカー選手のマカーロフ、イヴァンの娘のヴァーリヤが革命後の新しい世界の代表者だ。

小説のあらすじは次のようなものだ。カヴァレーロフは酔いつぶれていたところをアンドレイ・バービチェフに助けられ、そのままアンドレイの家に居候することになる。しかし、もともとそこに住んでいたマカーロフが帰省から戻ってきたため、居場所を失ってしまう。

マカーロフの恋人はアンドレイの姪ヴァーリヤだ。一方、ヴァーリヤの父（つまりアンドレイの兄）のイヴァンはロマンティックな夢想家で、ソヴィエト社会を憎んでいる。イヴァンとカヴァレーロフは新発明の機械「オフエーリア」を使って、アンドレイが建設する大食堂を破壊しようとするが、この計画は夢想の中でしか実現されない。

現実のソヴィエト社会では、ドイツとの親善試合でマカーロフが賞賛を浴びている。新しい世界との戦いを断念したイヴァンは、中年の寡婦アーネチカとの情事に耽ろうと、カヴァレーロフを誘う。

「オフエーリア」による食堂の破壊という幻想シーンと並んで、小説のクライマックスとなるのがサッカーの試合だが、ペップードによれば、これにはモデルがある。1927年5月21日にモスクワで行われた、「モスクワ選抜」対「ザクセン労働者選抜」の戦いで、4-1でモスクワ選抜が勝利している⁽²²⁾。

『羨望』の中には1920年代のソヴィエトに見られた2つのスポーツ観、すなわち生産システムの一部として人間を管理しようとする公衆衛生的な発想と、パレードと同様に「見るスポーツ」を重視するプロパガンダ的発想の双方を見ることができる。

『羨望』のマカーロフは「人間機械になりたい」という奇妙な欲望を語る。

21 *Старостин А. Я помню // Юность. 1983. № 5. С. 109.*

22 *Victor Peppard, The Poetics of Yury Olesha (Gainesville, 1989), p. 86.* なお、興味深いことに、翌22日に「ザクセン労働者選抜」はモスクワの「ピシェヴィク」と対戦し、3対4で敗北している。「ピシェヴィク」は「スパルターク」の前身となったチームであり、このチーム名は「食品工場の労働者」を意味している。つまり、1920年代の「スパルターク」は食肉工場のチームだったのであり、現在もこのチームは「ミャーサ」（肉の意）の愛称で親しまれているのだ。『羨望』において、サッカー選手マカーロフの庇護者となるアンドレイは食堂建設に携わっており、カヴァレーロフはアンドレイのことを「ソーセージ屋」と揶揄するが、この設定は「ピシェヴィク」を連想させる。『羨望』においてオレーシャが「ピシェヴィク」を念頭に置いていたかどうかは不明だが、いずれも詩情に乏しい物質的な文化が台頭するようになった革命直後の傾向を表していることは間違いない。

僕は人間機械なのです。あなたは僕を見分けられないでしょう。僕は機械になったのです。〔中略〕
余計な数字のないまま、働き続けるのです。僕もそうになりたいのです。⁽²³⁾

マカーロフのこの奇妙な欲望は、効率化を追求するテイラー・システムを研究し、人間を機械とみなそうとしたプロレタリートの詩人アレクセイ・ガースチェフの影響をうかがわせるものだ。ガースチェフにおいては、スポーツも労働のために存在していた。

身体は作業機械として養成されなければならない。

各々が体操選手にならなければならない。その結果、身体は敏捷さや構築性を獲得し、ひとつひとつの筋肉や精神の全体は最大の効率性に完全に慣れ、運動の自動調整器が、さらに大胆さが作り出される。⁽²⁴⁾

一方、『羨望』のサッカー場面では観客の存在も強調され、スポーツのスペクタクルとしての性格を意識させる。そこでは、それぞれのプレイヤーと観客の行動が、映画のクロスカッティングを思わせる形で交互に語られていく。『羨望』の語り手はプレイヤーであるマカーロフに注目し、その行動や心理を叙述するだけでなく、観客のヴァーリャや、ドイツ・チームのフォワードであるゲツケにも視線を送る。

ゲツケのスピードと勢いにしゃがみこんでしまったソヴィエトのディフェンスを置き去りにして、ゲツケはゴールに向かって突入し、シュートを放った。その時、ヴァーリャは隣の席の人の方によるめき、片手でその人につかまると、手に頬を押し付け、顔を隠せば怖い場面を見ずにいられるとだけ考えながら、炎天下を走って真っ黒になったゲツケの恐ろしい動きを横目で見続けた。

だが、ソヴィエト・チームのゴールキーパー、ヴォロージャ・マカーロフは、ボールをつかんだ。⁽²⁵⁾

現代の読者にとっては自然に思える語り方だが、『アンナ・カレーニナ』の競馬の場面において、語り手が競馬の開始から落馬までヴロンスキイの心理に寄り添った後、再び同じレースをアンナやアレクセイ・カレーニンの視点から語り直していることを思うならば、2つのテキストの違いの大きさに気づくはずだ。

『アンナ・カレーニナ』においては、登場人物それぞれの意識の動きが重要になっており、語り手はそれぞれの人物の視点に立つと、そこから動くことがない。視点を変えるためには、物語を始めから語り直さなければならない。

一方、『羨望』において、語り手は視線をあちこちに送りながら、多数の人物の動きを次々ととらえていく。『アンナ・カレーニナ』のようにプレイヤーの意識と観客の意識が別々に語られるのではなく、それらが同時に語られるのである。世界を個の意識にとどめるのでは

23 Олеша. Избранное. С. 45.

24 Гастев А. Поэзия рабочего удара. М., 1964. С. 35.

25 Олеша. Избранное. С. 84.

なく、個の意識が交錯する場としてスタジアムが表現されるのだ。

複数のプレイヤーと観客が競技という場を成立させていることを、オレーシャは明確に意識している。『羨望』のサッカーは、主人公の試練の場としてのみ存在するわけではない。ナボコフが感じていたようなゴールキーパーの孤独も、そこには見られない。ナボコフの『偉業』では試合の後、ゴールキーパーのマルティンがヒロインのソーニャに置き去りにされる。だが、『羨望』では観衆がマカーロフを取り囲み、胴上げするのだ。

剥きだしにされた肌が音を立てる、輝く身体が群衆の上を斜めに飛んでいた。ヴォロージャ・マカーロフが胴上げされていたのだ。⁽²⁶⁾

観客と選手はここで一体化している。スポーツはもはやプレイヤーの私事ではなく、国民的な行事であり、プレイヤーは国家の英雄と化してしまう。

愛国的な姿でゴールキーパーが描かれるのは、レフ・カッシーリの長編『共和国のゴールキーパー』(1938)においても同様だ。これは映画『ゴールキーパー』(1936)の原作だが、小説の発表は1938年末の映画の公開を待って行われた。

『共和国の……』というタイトルが示すように、ここではゴールを守ることが国家の防衛という意味に転化している。序論で述べたようにソ連の体力検定GTOは、「労働と国防のための準備」を意味する«готовность к труду и обороне»の略称だが、当時のソ連においてはスポーツが、生産だけでなく軍事を支えるものとして理解されていたのである。

レフ・カッシーリは1905年に、ヴォルガ川沿いのポクロフスカヤ・スロボダ(現エンゲルス市)に生まれている。児童文学の作家として知られるカッシーリだが、サッカーをテーマとした『共和国のゴールキーパー』の他にも、スキークロスカントリー競技を扱った『白い女王の歩み』(1956)、サーカスのレスラーを主人公とした『剣闘士の杯』(1960)など、スポーツに関する作品を残している。

『共和国のゴールキーパー』の主人公はアントン・カンディードフだ。荷役の仕事をしてきた彼は水上艇工場「ギドラエル」の労働者たちと知り合い、そのサッカー・チームでプレーすることになる。

もう1人の主人公はアントンの幼馴染の、エヴゲニイ・カラシクだ。成長したカラシクはジャーナリストになり、アントンの活躍を見つめている。

ゴールキーパーとしての才能を開花させ、無失点試合を続けたアントンは、ソ連代表チームの一員として世界最強のクラブチーム「王の水牛たち」と戦うことになる。「王の水牛たち」の猛攻を、そして試合終了間際のペナルティキックをも防いだアントンは、掴んだボールを相手ゴールまでドリブルし、たった1人だけで決勝点を挙げてしまう。

この試合でアントンの名声は高まるが、カラシクはゴールポストを空にしたアントンの行為を無謀なものとして批判する。アントンが「ギドラエル」から「マグネット」にチームを移籍したこともあり、2人の関係は悪化する。

「ギドラエル」と「マグネット」が対戦するスパルタキアードの決勝戦が、小説のクライマックス

26 Олеша. Избранное. С. 87.

クスだ。「ギドラエル」の前には、かつてのチームメイトのアントンが立ちはだかる。だが、奮起した選手たちはアントンから同点ゴールを奪い、これに動揺したアントンはオフサイドの判定をめぐって退場処分となってしまう。

失意に沈んだアントンだが、かつての恋人ナースチャがまだ自分を愛していることを知り、ナースチャやカラシク、「ギドラエル」の選手たちと和解する。「ギドラエル」に復帰したアントンが「赤の広場」でプレーしている場面で、小説は終わる。

この小説をもとにした映画『ゴールキーパー』では、物語の順序が入れ替わっている。「ギドラエル」と「マグネト」の戦いは、映画の中盤に置かれている。さらに、「ギドラエル」の選手たちがスタジアムにパラシュートで降下するという軍事色の強い演出が加えられ、「祖国を守る者」という意味を強めている。

映画の最後に提示されるのが、「王の水牛たち」との試合だ。外国チームとの戦いが最後のクライマックスとなっていることもまた、防衛色を強めていると言えるだろう。

アントン・カンディードフを映画で見た少年たちは大人になってから、卓越したゴールキーパーがソ連チームで活躍する姿を現実に見ることになる。1950～60年代にかけて国際大会に出場した、サッカー史上最高のゴールキーパーとも言われるレフ・ヤシンだ。

国民から讃えられる伝説的な選手というイメージは、メッセンジャーの「ポピュラー・スポーツ・ヒーロー」にも通じるものだろう。ただし、ソヴィエトの場合、それは生産主義や軍国主義と結合した形で表現されたのである。それは遊戯であるはずのスポーツが孕んでいた「真剣さ」が、国家主義的な形に転化したものとも言える。

3. 人生の断片（雪どけ期）

第2次世界大戦後のソ連はオリンピックやワールドカップといった国際競争の場に参加するようになり、それに伴いスポーツの目的も「労働と防衛のための準備」から勝利による国威発揚へと変質していった。ソ連選手の活躍を伝えるジャーナリズムの役割も、大きくなっていった。

『身体文化とスポーツ』などスポーツ報道に携わる雑誌には、スポーツ小説やスポーツ詩の欄も設けられており、ユーリイ・カザコフなど著名な作家もそこに寄稿していた。この『身体文化とスポーツ』誌の編集者兼ライターとして活躍していたのが、作家のユーリイ・トリフォノフだ。

トリフォノフはユーリイ・ナギービンと共に、「雪どけ」の時代のスポーツ文学を代表する作家である。たとえば、セルゲイ・アブラモフは1983年の『プラウダ』紙に掲載した記事で、ソ連のスポーツ文学の開拓者としてカッシーリ、ナギービン、トリフォノフの3名を挙げている⁽²⁷⁾。

1925年に生まれたユーリイ・トリフォノフだが、1930年代後半の大量抑圧の時代に両親を失っている。父ヴァレンチンは銃殺され、母エヴゲーニヤ・ルリエはカラガンダの強制収容所に送られた。

27 *Абрамов С. Не только цифры // Правда. 17 марта 1983. № 76 (23602). С. 6.*

ゴリキイ文学大学を卒業したトリーフォノフは、卒業制作の中編小説『学生たち』(1950)で作家としての名声を得る。だが、「人民の敵」の息子が、そのまま成功者となることはできなかった。『学生たち』を掲載した文芸誌『ノーヴァイ・ミール』の編集長アレクサンドル・トヴァルドフスキは、トリーフォノフと長編小説の契約を結ぶことを拒み、短編から始めるよう勧めた⁽²⁸⁾。

失意に沈んだトリーフォノフの前に現れたのが、『身体文化とスポーツ』誌の編集者としての仕事だった。この雑誌の編集部には詩人のエヴゲニイ・エフトウシェンコが既に働いており、ジャーナリズムの世界におけるトリーフォノフの師となった。トリーフォノフは1955年から72年まで18年間にわたり、この雑誌の編集部で働き続けた⁽²⁹⁾。

トリーフォノフはスポーツ記事だけでなく、スポーツをテーマにした短編小説をも執筆し、『身体文化とスポーツ』誌の文芸欄や他の雑誌に発表していった。それらの短編小説は1989年に、映画シナリオやスポーツ評論と併せ、『終わりなきゲーム』の題で単行本として刊行されている(モスクワ、「身体文化とスポーツ」社)。

『終わりなきゲーム』に収められた短編小説の多くに共通しているのは、哀愁と幻滅感だ。

「シーズンの終わり」(1956)の主人公は、かつての名サッカー選手マラホフだ。監督になろうとしている彼は、自らのチームに必要なセンターバックのブリツキイを引き抜くために、地方都市を訪れる。移籍に同意したブリツキイにマラホフはふと、元のチームはどうなるだろうかと質問する。ブリツキイの答えは、自分なしては勝てないだろう、という冷淡なものだ。カッシーリ『共和国のゴールキーパー』と同じく、選手の移籍問題を主題とした小説だが、登場人物のビジネスライクな対応がアイロニーにつながっている。

「スウェーデンに勝った者」(1957)の主人公は少年のアリョーシャだ。ホッケー選手ドゥガーノフの恋人マイカと同じアパートに住んでいたアリョーシャは、ドゥガーノフの誘いをマイカに伝える役を引き受ける。ドゥガーノフとは会わないとマイカは言うが、アリョーシャはドゥガーノフに、マイカは来ると嘘を伝える。スウェーデンとの試合の後、アリョーシャはマイカを待つドゥガーノフに話しかけるが、そっけない返事しか得られない。そして、来ないはずだったマイカがドゥガーノフのもとに現われ、2人は仲良く立ち去っていく。後に残されたアリョーシャは、急に疲労を感じることになる。

「秋の透明な太陽」(1959)は空港を舞台としている。かつて体育大学でライヴァル同士だったヴェリチキンとガレットキイが、ビュッフエで偶然、20年ぶりに再会する。現在のヴェリチキンはモスクワでスポーツ団体の経営に携わっており、バレーボールチームの中国遠征に団長として同行しているところだ。一方、ガレットキイは田舎で教師をしており、自分の生徒を引率している。望み通りの人生を歩んだガレットキイは自らを成功者と感じ、失恋の末にデスクワークに就いたヴェリチキンを人生の敗者だと思っている。だが、首都で活躍するヴェリチキンも、田舎で暮らしているガレットキイの生徒たちも、そのようには思っていない。

28 *Иванова Н.* Проза Юрия Трифонова. М., 1984. С. 34–35.

29 *Нилин А.* Юрий Трифонов: журналист // Мир прозы Юрия Трифонова. Екатеринбург, 2000. С. 141.

これらの作品では人生の影のような出来事が哀愁を醸し出しているが、「黄昏のゲーム」(1968)にはノスタルジーという別の主題も登場する。この短編小説の舞台となるのは、1930年代のモスクワ郊外の別荘地だ。夕方になると名士の子弟がそのテニスコートに集まり、テニスの練習をする。新参者のボリスが紅一点のアンチクを殴ったり、オーケストラの団体にテニスコートから追い出されたりと、苦い思い出もある。大人になってから、主人公はその場所を再訪するが、もうテニスコートは残っていない。近くの川はまだ流れているが、かつてのようにそこで泳ぐ気持ちにはなれない。11歳の時には黄昏時がとても暖かいものだったが、今はそうでないのだ。

スターリン期の回想という主題は、長編『川岸の館』(1976)や『消失』(1978)、『その時、その所』(1981)など、後のトリーフォノフの作品に連なるものだ。だが、そのようなソヴィエト特有の文脈とは別にここには、スポーツと青春がノスタルジーの中で結合するという、より普遍的な現象も指摘できるだろう。

これらトリーフォノフの短編は人生の断片を切り取ったものだが、ナターリヤ・イヴァノヴァは「トリーフォノフにとってスポーツは人生や現実の独特なモデルだったのだ」と記している⁽³⁰⁾。一方、アレクサンドル・ニリンは、人生のモデルではなくメタファーなのだとする。人生がスポーツを真似るのではなく、人生と同様の緊張感をスポーツにも見出せる、というのがニリンの言いたいことだろう⁽³¹⁾。

ニリンによれば、トリーフォノフの場合でもスポーツは生死に通じている。しかし、トリーフォノフの短編小説には、クプリーンの「サーカスにて」や「エメラルド」のような悲劇は存在しない。悪戯をしたことすら気づいてもらえない「スウェーデンに勝った者」のアリョーシャや、女性を殴ったことで周囲のものを呆れさせる「黄昏のゲーム」のボリスのように、生死を司る運命の女神たちも気づかぬような、慎ましい形で敗北は起きるのだ。それは本人にとっては大きな敗北であっても、他者から見れば日常の些事ではない。

トリーフォノフの哀愁は、このような日常性の中から生まれてくる。と同時に、「スウェーデンに勝った者」や「黄昏のゲーム」におけるように、そうした日常を主人公にとっての忘れられない思い出と化すのもスポーツなのだ。スポーツにより日常生活は、神話的な次元に高められるのである。

死ではなく幻滅を語ったトリーフォノフは、悲劇的な運命（トルストイやクプリーンの場合）や国家的使命（オレーシャやカッシーリの場合）に対抗しうる、個人的かつ市民的な場を確保している。「雪どけ」の精神とはそうしたものだだろう。

まとめ

スポーツも文学も人類共通の文化であり、スポーツを描く文学にもまた、民族の歴史や文化の枠を越えた共通性を指摘できるだろう。遊戯をめぐるホイジンガーやカイヨワの古典的な議論や、メッセンジャーによるアメリカ文学についての議論をロシア文学に適用し、それ

30 *Иванова. Проза Юрия Трифонова. С. 41.*

31 *Нилин. Юрий Трифонов: журналист. С. 146.*

ぞれの共通性を見出すこと、あるいはそれぞれの比較によって差異を探ることもできる。だが、本稿では、ロシア社会や文化の変化に即して、文学作品に現われた諸主題とその交代の在り方に注目してみた。

ロシアのリアリズム文学において、スポーツは生死を賭して戦うものであり、それはトルストイ『アンナ・カレーニナ』やクプリーン「サーカスにて」の場合のように、運命的な敗北として表現された。ナボコフの場合、スポーツは高次の生に到達するための道でもあった。

しかし、スターリン期になると、スポーツは生産主義や軍国主義と結合し、国家に奉仕するものとなる。これは「見るスポーツ」の発展期とも重なっており、スポーツマンの勝利は個人的なものにとどまらず、国民的に共有されることとなった。オレーシャ『羨望』やカッシーリ『共和国の防衛者』はこうした時代の産物である。

「雪どけ」期になると、文学表象としてのスポーツは市民的な空間、個人的な空間に戻ってくる。トリーフォノフの短編小説はその好例である。スターリン期という英雄賛美の時代を経験した後に、ソヴィエト文学は醒めた冷やかな視線を獲得したのである。

運命との対決、国家への奉仕、人生の哀愁といったそれぞれの時代のテーマは、いずれもスポーツにおける遊戯性とは別の側面、すなわち「真剣さ」を示すものだ。ロシア文学ではスポーツの「真剣さ」が社会の変化につれ、様々な形に変容していったと言える。